

IV 動物由来感染症が疑われる動物の解剖

特定の動物由来感染症が疑われる動物が搬入され、解剖が必要になった場合の作業手順は以下に定めるものとする。

「東京都動物愛護相談センターにおける動物由来感染症発生時対応マニュアル」VI「城南島出張所での動物の受け入れ等」（以下、「発生時マニュアル」）も参照する。

1 解剖室及び小動物解剖室への入室と動物の搬入

① 従事職員

解剖室への入室法はⅢの1①に準じること。

なお、小動物解剖室への入室は解剖室を経由すること。

② 当該動物（死体搬入の場合）

感染症動物搬入口から搬入すること。

なお、当該動物の大きさにより解剖室又は小動物解剖室に搬入すること（「発生時マニュアル」参照）。解剖室に搬入する場合は小動物解剖室を経由すること。

当該動物が生体で搬入され、致死処分が必要な場合は、「発生時マニュアル」を参照し行うこと。

2 従事職員の防護用具

「発生時マニュアル」を参照すること。

なお、消毒薬は、「発生時マニュアル」に記載された対象病原体に効果のある薬剤を使用すること。

3 解剖の基本原則

【基本原則】

① Ⅲの3①に準じること。

【施設設備】

② 解剖台（解剖室を使用する場合）

ファン・蛍光灯・殺菌灯のスイッチを必ず入れること。解剖台は常に閉鎖状態とし、臨床板上に、撥水性シート（ブルーシート等）を敷き、さらにその上に吸水性シートを敷き、当該動物を置くこと（「発生時マニュアル」参照）。

③ 安全キャビネット（小動物解剖室を使用する場合）

ファン・蛍光灯のスイッチを必ず入れること。臨床板上に、撥水性シート（ブルーシート等）を敷き、さらにその上に吸水性シートを敷き、当該動物を置くこと（「発生時マニュアル」参照）。

④ 床、シンク等

解剖中、必要が生じた場合の床面の洗浄は、汚水等の飛散による汚染拡大等防止のためゴムホース使用による水洗等は行わないこと。解剖台付属のシンク及び洗浄用シンク 2 箇所は使用を止め、それぞれのシンク内には消毒液を適量満たした上で閉鎖すること。

また、シンク内の消毒液が高度に汚れた場合は適宜交換すること。

【対象動物等】

⑤ 動物

解剖に際し予め体表面を消毒すること。解剖体から出る血液や体液はキムタオル等で吸収し解剖体に戻すこと。

⑥ 検査材料の取扱い

採取物を入れる検体容器の外側は、消毒用エタノールで消毒すること。

【事故対応】

⑦ 事故への対応

解剖中における事故に対しては機敏に的確な対応を行うようにすること。事故の処理については別記すること。

4 解剖後の消毒と基本原則

【対象動物等】

① 動物

対象動物は、汚染拡大等の防止のために撥水性シート・吸水性シートごとポリ袋に入れて袋の口を縛った上で、炉室側扉から搬出し、保管すべき特段の理由がない限り、速やかに焼却すること。

【施設設備】

② 解剖台

臨床板を消毒した後、洗浄水を飛散させることなく洗浄を行うこと。その際には吸い込み口に水がかからないよう注意すること。

なお、洗浄後は殺菌灯を3時間点灯すること。

③ 安全キャビネット

臨床板を消毒した後、殺菌灯を3時間点灯すること。

なお、対象動物等の取扱いは前記①に準じて行うこと。

④ 床、壁、解剖台側面

血液、体液等の汚染が認められた部分を消毒薬で清拭した後、必要に応じ洗浄水を飛散させることなく洗浄すること。その際には解剖台側面のスイッチ部分には水がかからないように十分注意すること。

【器具器材】

⑤ 器具、器材

使用した後は、消毒薬に浸漬消毒し、洗浄後、器具の材質に応じて適切な方法で滅菌すること。

なお、使用済み注射針等は、解剖室内の医療用廃棄物ボックスに廃棄すること。

【消毒・廃棄・保管】

⑥ 解剖に使用した防護用具の消毒と廃棄

手順（別記「脱衣手順の流れ」参照）に従って、防護服等の脱衣を行うこと。

なお、長靴以外の防護用具は廃棄又は焼却とすること。

⑦ 手指

薬用石鹼で洗浄後、自動消毒器で消毒すること。

⑧ 殺菌灯

解剖室、準備室の殺菌灯を3時間点灯すること。

V 事故と対応

解剖時等に万一受傷した場合は、すみやかに次の処置をすること。

【応急措置等】

- ① 直ちに作業から離れること。
- ② 受傷部位(傷口)から血液を絞りだすとともに、受傷部位を流水で十分に洗浄した後、0.2～1.0%次亜塩素酸ソーダに3～5分間浸すこと。
- ③ 必要に応じて医療機関で受診すること。(この場合は、医療機関に公務災害の措置を行う旨を伝えるとともに、速やかに事後の所定の手続きを行うこと)。
- ④ 疑狂犬病の動物を扱っていた場合は、医療機関で狂犬病ワクチンの接種プログラム(暴露後免疫)を開始すること。
なお、当該動物が狂犬病陰性であることが判明した場合は、その時点で当該医療機関と相談の上ワクチン接種を中止すること。

【事故報告】

- ⑤ 事故の内容・経過については、出張所長を通じて速やかに動物愛護相談センター長に報告すること。

【別記：脱衣手順の流れ】

準備室の履替スペースに撥水性シート（ブルーシート等）を敷き、脱衣場を作る。
サポート者がサポートする。

- ① サポート者が全身に消毒薬を噴霧する。
- ② 外側の手袋を外す。
片方の手袋の袖の部分をつまみ、裏返しにして、手首の位置まで下げる。もう片方の手袋の袖の部分をつまみ、全て外す。手首まで下げた手袋の裏返した部分をつまんで外す。
- ③ 手を消毒する。
- ④ 前掛けを脱ぐ。
腕を回さない。前掛けの外側をさわらないようにする。腰部のひもを中に押し込むように丸める。
- ⑤ 防護服を脱ぐ。
腕を回さない。防護服の外側をさわらないように丸める。
- ⑥ 手を消毒する。
- ⑦ フェースガード・保護眼鏡を外す。
- ⑧ キャップを外す。
- ⑨ マスクを外す。
- ⑩ 長靴カバーを外し、長靴を脱ぐ。上履きに履き替える。
- ⑪ 内層のゴム手袋を外す。
- ⑫ 手を十分に消毒する。
- ⑬ 履替スペースの噴霧消毒を行う。

脱衣は順次大ポリ袋（ゴミ袋）に入れ、医療廃棄物として廃棄するか、焼却する。

参考

解剖室使用後の消毒と清掃について

ナイフ・ハサミ等

- 1 解剖後は、ナイフ・ハサミ・バット等を 30 分以上パコマに漬ける（流しのところ）。
- 2 漬け終わったら、洗浄して、水切りカゴで乾かす。

解剖台

- 1 血液などで汚れたところはパコマをかけてキムタオルなどでふき取る。（キムタオルは医療用廃棄物へ）。
- 2 あまり汚れていない時は、水をかけて洗う必要はない。3 洗う時は、吸い込み口・スイッチに水がかからないように注意する。

床・壁

- 1 血液などで汚れたところはパコマをかけて流す。
- 2 あまり汚れていない時は、水をかけて洗う必要はない。3 洗う時は、水がはねないように注意する。

パコマ消毒液の作成

<作り方>

水 1ℓに対し、パコマ L 原液は 2.5ml（400 倍液）
（水 10ℓならパコマ L 原液は 25ml）

【めやす】

ピッチャー	2ℓ		
ステンレス荒い桶	10ℓ		
流し（大きい方）3 cm くらいたまったら、	10ℓ		
”	6 cm	”	20ℓ

作るときは目に入らないよう注意する。

疑似狂犬病犬 解剖手技・骨切断モデルセット

取り扱い説明書

平成21年度厚生労働科学研究費補助金

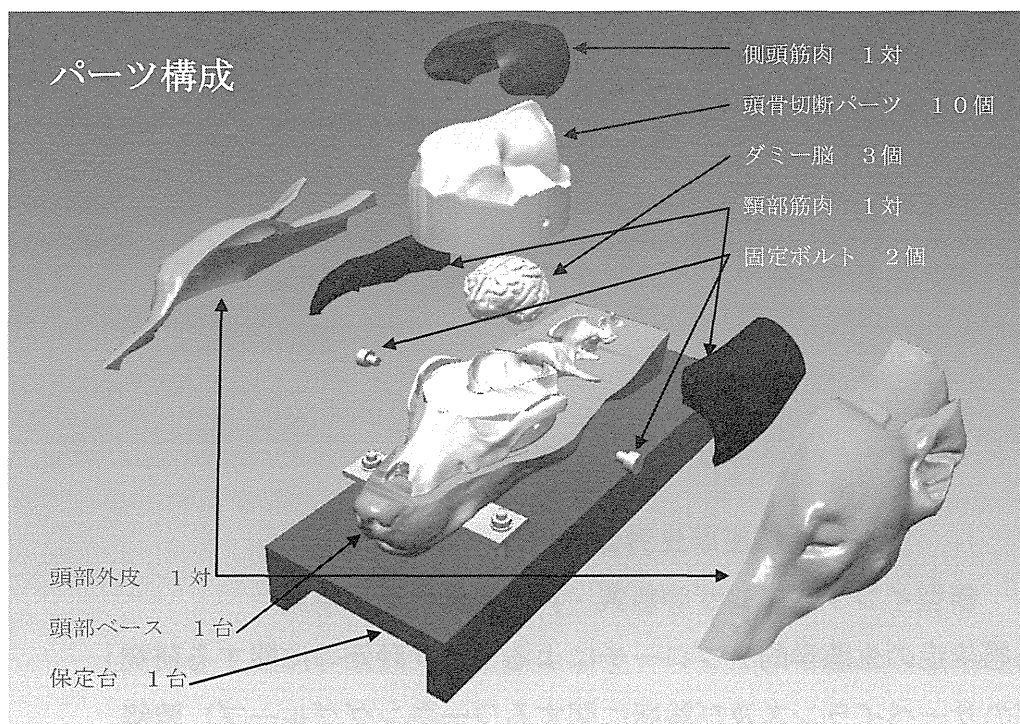
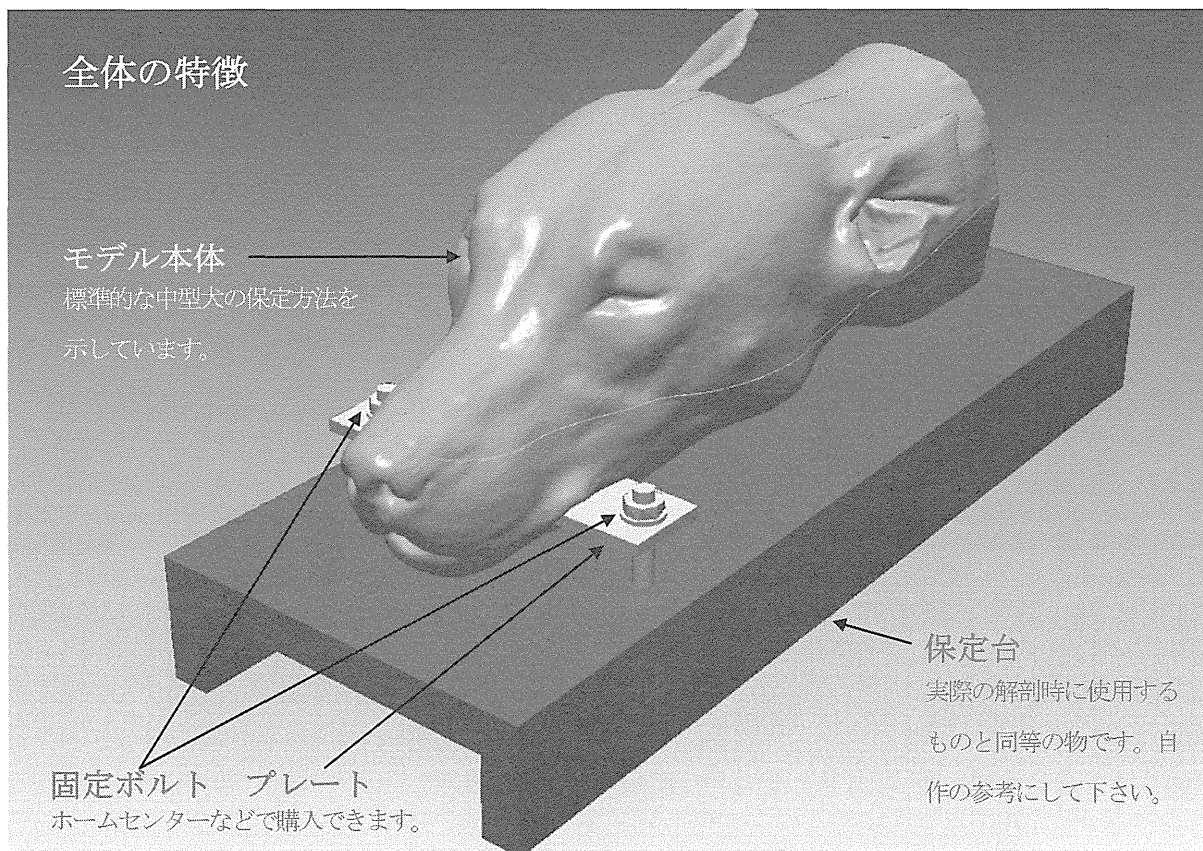
新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業

「動物由来感染症の生態学的アプローチによるリスク評価等に関する研究」

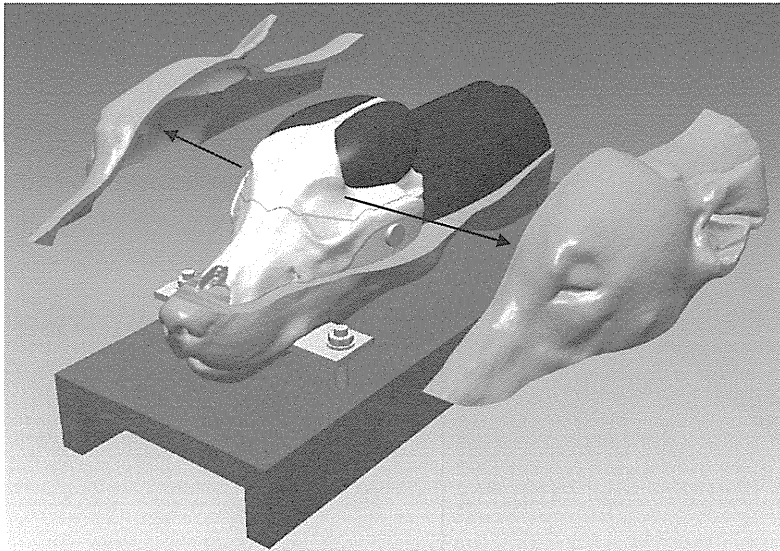
(狂犬病のサーベイランス及び診断に関するワーキンググループ) 監修

株式会社 モルフォバイオイメージング研究所 販売

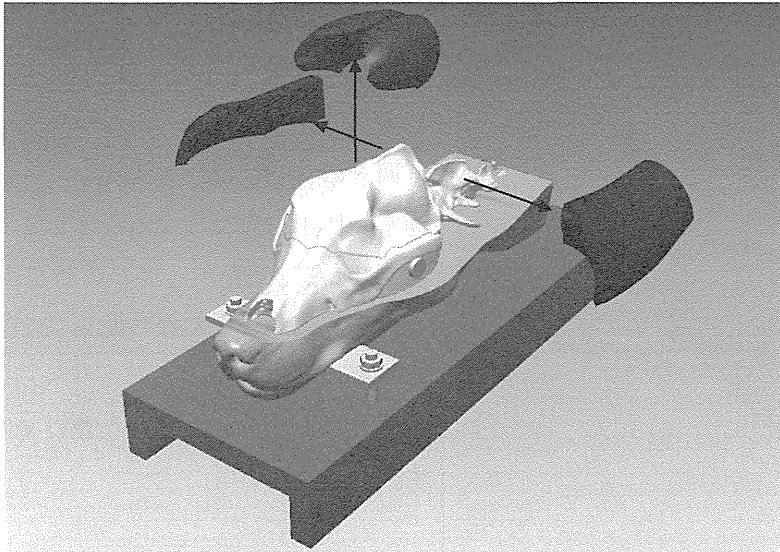
犬解剖手技・骨切断モデル 取り扱い説明書



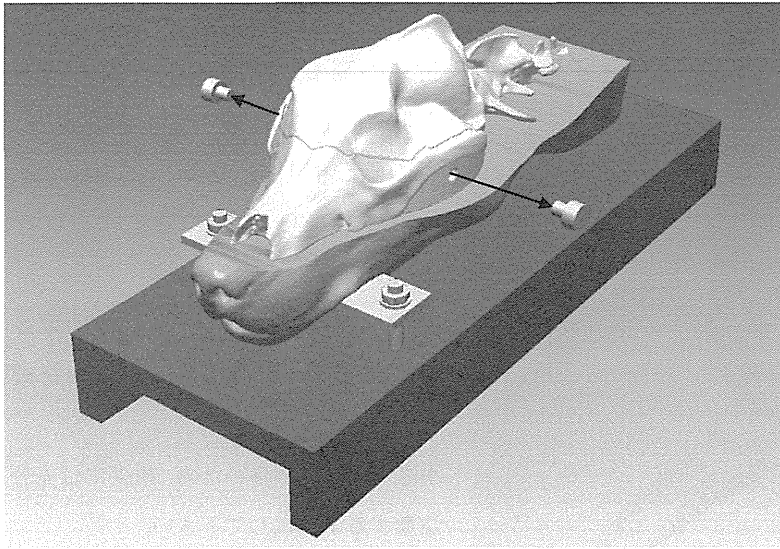
分解・パーツ交換の手順



頭部外皮パーツは、実際の解剖時と同様に、正中で2分割されます。付属の解剖手技DVDの映像と照らし合わせて、切開部位を確認しながら取り外して下さい。本体を持ち運ぶ場合は、外皮パーツが脱落しないように、顎下から頭頂にかけて紐をかけたり、マスキングテープなどで固定すると良いでしょう。



側頭筋・頸部筋肉の順に取り外します。側頭筋は、外皮パーツを外す時に脱落しないように、粘着シートで頭骨に固定されています。粘着力が弱まって側頭筋が落ちてしまうようになったら、付属の粘着シートで補修します。そのままでは、粘着力が強過ぎるため、側頭筋側に貼り付け後、粘着部を素手の指で数度押さえて粘着力を弱めると良いでしょう。



頭骨パーツは、実際にノコギリなどで切断することができます。切断後、新しい頭骨パーツに取り換える場合は、両側にある2か所のネジを、付属の六角レンチを使用してはずします。ネジを締める時は、まず手で回らなくなるまでねじ込み、最後だけレンチを使用して締め込みましょう。ネジの締め過ぎに注意して下さい。緩める時も同様です。